

日本南極観測黎明期における京都大学のかかわり

北村泰一（1955：修士課程修了，1961：博士課程修了，九州大学名誉教授）

1. 長谷川万吉先生と南極とぼく

1954年4月、私は、福島 紳 君と橋詰庄一郎君と共に、大学院修士課程、長谷川万吉教授（地球電磁気）の研究室に入った。私の直接の指導教官は広野求和氏。地磁気の指導を受けた。

・心に火がついた

修士2回生の7月頃だったと記憶する。主任教授の長谷川先生に呼びだされた。長谷川先生は口調がまだるっこしいので有名であった。話は往々にして途切れ、数秒から1分ほど沈黙が続く。やがて話が再開…というように一つの話が金魚の糞のように途絶えては続く。そしてまた途絶える。学生は、前の話を覚えておかないと会話ができない。何のことだろうと、すぐに教授室に赴いた。ドアをノックして開け、不動の姿勢をとり、「はい！北村です」。先生はぼくの顔をみて、「おう、北村君か…」。話は暫く途切れて、「君い、南極へ行かんかねえ…」、「？……」。長谷川万吉先生はそう言ったままクルリと回転椅子回して窓外を眺めてしまった。話のワケがわからない。私は長期戦を覚悟した。話はそれで終わった。だが、自分の心にポツンと火が点ったような気がした。

後で判ったことだが、その時、世界中で協同して地球全体を同時観測する IGY 計画(国際地球観測年)の立案が進んでいた。その中で、特に南極地域での地球物理的測定（地磁気・オーロラ・電離層等の観測）を共同して実施しようという特別計画が進んでいた。7月（1955）には第一回南極観測国際会議がパリで開かれ、各国がエントリー（参加表明）を果たした。

日本は敗戦国で、当時、まだ社会は疲弊していた。とても南極なんか考えられない、と長谷川先生達は考えていた。この年の初め（1955年1月）、朝日新聞の矢田記者が、「北極と南極」という記事を書いているうちに、世界がこぞって南極を観測する動き（IGY）を知り、日本の学者を南極へ送りこめないかとのアイデアが生まれてきた、というのが、南極構想の始まりだとされている。

朝日からの呼びかけで、日本の学者（茅誠司学術会議会長、長谷川万吉京大教授、永田武東大教授等）は、俄かに南極観測参加への夢を持つことになったが、今まで国際舞台で南極に興味を示さなかった日本へは、第一回パリ南極会議からの招待状は来なかった。日本は出席しなかったが、参加の表明だけは書面でなされた。この時、大変なドラマがあったが、ここでは省略する。その9月に、実質的に南極観測を討議する第二回南極観測国際会議のベルギーのブリュッセルでの開催が予定されていた。今度は日本代表団が出席して、日本の計画を具体的に発表することになっていた。

・そんな殺生な、人の心に火をつけておいて！（長谷川教授の態度急変）

ぼくは、山岳部に所属していて、冬山など野外生活に慣れ親しんでいたが、そのことを研究室内では隠していた。『あいつは山ばかり行って勉強をしない』と思われたくなかったからだ。山へ行っている時間だけ、友人より努力をしていた積りだった。そんなに気を使って隠しているのに、ぼくに『南極へ行かんか』と言った先生は、いつも日焼けしている僕の顔に気がついていて、僕の山好きを見抜いていたのかもしれない。その時、長谷川先生は、日本の学会の最長老として、9月のブリュッセル会議の日本代表派遣団の団長であった。今から思えば、団長として自分の配下から一人くらい南極へ出さなくてはならないと考えていたのかも知れなかった。

ところが、コトは意外な方向に進んでいった。私は、先生の帰りを今か今かと待っていた（修士課程2回生の夏）。早く結果が知りたい、日本の計画を世界はどのように受け取ったのだろうか。その頃は敗戦から10年あまり、まだ日本は国連にも加入が認められておらず、社会は沈滞していた。日本は四等国と言われ、自らもそう思いこんでいた。やっとのことで、ブリュッセルから先生が帰国した。帰国した長谷川先生は、いつまでも知らぬ顔であった。『北村君。南極へ行かんかねえ？…』と言ったことをまるで忘れたような顔つきだった。廊下ですれ違っても目をあわず、パイと他を向いてしまう。

いらいらする日が続いた。あの時、「行きます」と即答した訳でもないのに、アレ（ブリュッセル会議）どうでしたか、とも尋ねられない。ぼくの『南極へ行きたい』という気持ちはだんだんと高じてきた。しかし、長谷川先生は、以後、南極のナ字にも触れず知らんぷりであった。朝日新聞には毎日のように南極の記事が載った。「南極」は社会の話題になり始めた。山岳部内でも、話は南極のこととなった。

その頃、ぼくは「一体、ぼくには何が出来るのだろうか…」とか「生きている目的」とかが気になりだし、毎日、手探りでその答えを求めている。ある時、山を彷徨っていて「探検」という文字に突き当たった。それは中学時代の先生の影響と山岳部での教えが原因であったように思う。当時（1953）、世界最高峰のエベレスト（8848m）がヒラリー・テンジンによって登られた。人々は、その第二登に夢中になった。山岳部の友人や自分たちも、実力もないのにその気になっていた。それが山を志す者の目標だと思っていた。ところが、若い先輩などがテントの中で、「お前らはエベレストの第二登など、ヒラリーやデンジンの後塵を拝したいのか。それより低くてもよい、お前らの前に足跡のないところへ登れ！」「これは、今西さん、西堀さんの考え方だ！・・京大山岳部のゆき方だ！・・」。今西さんとは今西錦司京大教授、西堀さんは西堀栄三郎氏（のち京大教授）のことで、ともに京大山岳部の創始者のような人であった。今西錦司先生のことを、普通、今西さんと呼ぶ。誰も先生とは呼ばない。

これですっきりした。中学では「諸君はパイオニアの人生を送れ。」とか「パイオニアの匂いが少しでも残っているとするとそれは北海道だ。諸君は北大へゆけ！」とか、先生が口ぐせのように言っていた。パイオニアがどういう意味なのか、判らなかったが、パイオニアという言葉は耳に残った。高校では、「ぼくの前に道はない・・・」という詩を暗誦させられた。そして、今、「低くてもよい、人の足跡のない山に登れ」という。ハハーン。これらは、みな同じことを言っているのだな、ああ判った。これらはみな、「探検」が生きる道として最も貴いと言っているのだな、と。

その頃は、『探検』と言う言葉は“人跡未踏の土地、地理的な未知”に対する言葉だと思っていた。学問的（頭脳的）な探検もある筈だが、それは自分の力の及ぶところではない。世界の「地理的な未知」を訪ねて（当時は南極とかヒマラヤとか中国の奥に、未踏の領域がいっぱいあった）、これを『探検』と言うなら、それなら自分でも出来るかも知れないと思った。体力なら人にひけをとらない自信があった。困難や苦勞に耐えることなら人に負けない。肉体的危険をおかし、精神的困苦をしのいで、地理的な未知を訪ねることが『探検』と言うなら、それなら自分でも出来るかも知れないと思った。

・南極研究会

長谷川万吉先生は、相変わらずぼくに「南極に行かんかねえ」と言ったことは忘れたように触れなかった。その内に、東京の西堀栄三郎さんが、設営の責任者（副隊長）になることが決まった。そうした南極のニュースが我々の耳にも入り始めたころ、今西錦司さんの発案で、南極に関心のある京大教授や、山岳部の学生やAACK（Academic Alpine Club of Kyoto：京大学士山岳会）の院生たちと『南極研究会』という会を立ち上げた。長谷川先生が会長でぼくが事務局長となった。初会合を楽友会館の一室で開いた。

今西さんは、AACKの始祖、教祖、ボス、黒幕であり、何事にも、後ろにはいつも今西さんがいた。今西さんは実に不思議な存在であった。単に山登りの大先輩とか長老というだけではなかった。今西さんの言葉はいつも人の意表をつき、聞く人々はそれに同意し従わざるを得ない気持ちにするという不思議な個性の持ち主であった。この今西さんに心酔した青年は京都に数多くいる。私も敬服していた。

年が明けて1956年1月から2月にかけて、朝日新聞社の主導で、北海道の湧別湖で南極設営の訓練があった。参加者は、各学会から隊員にと推薦された研究者と東京で設営準備を援けていた早大の山岳部の人達であった。我々京大山岳部には誘いの声はかからなかった。内心我々は焦った。コトは東京でどんどん進行している。長谷川万吉先生は、南極研究会ではいろいろ発言するくせに、ぼくに言った言葉には忘れたように触れない。

ある時、今西さんが研究会で発言した。『南極のことは今東京で進行している。京都に居てお座敷がかかるのを待っているようではアカン。誰か東京へ行け・・・』東京へ？ 短期間の旅行ならすぐに来るが、今西さんの言う意味はそんなことではない。長期間、ひよっとしたら、1年か数年間、東京へ行っでそこで生活し、南極の準備の手伝いをするとか情勢を探るとかせよというのだ。でも、身は大学院生、どうしたら東京で生活できるのか？ 収入もないし、第一、京大の大学院生という身分はどうするのか？ コトはそう簡単ではなかった。

この時期、南極遠征の準備は、“南極準備の大政奉還”というべき一種の“政変”があつて、準備は急

速に朝日から政府（と東大山の会）の手へと移っていった。我々は焦った。3月末(1956)には乗鞍での南極関係者のスキー訓練が実施されるという。これは東大山の会の主導で準備された。南極隊員は、この乗鞍スキー訓練参加者の中から選ばれると噂がたった。もうグズグズ出来ない。たまりかねて、招かれもしないのに我々京大山岳部から数人乗鞍へ押し掛けた。なんとか南極の計画関係者に渡りをつけ、準備の様子などを聞きたい。だが、可能な道は副隊長の西堀さんにしかなかった。西堀さんに会う方法はないか。だが、そんな人にどう渡りをつけたらよいのか？ 会ってくれないに決まっている。悩む日々が続いた。どうしたらよいのかも判らない。これが『ぼくの前には道はない・・・』ということか・・・。

・一筋の光明（紹介状）

長谷川万吉先生の南極に対する態度が冷たく急変しているので、もう長谷川先生の線は諦めねばならなかった。今西さんの線で何とかならないだろうか。そんなある時、ハット気がついた、これだ！ 噂によると、今西さんの妹さんが西堀美保子夫人である。南極への道の突破口はこれしかない。今西さんに紹介状を貰うしかない。長谷川万吉先生に灯されたぼくの胸の火が、この頃の連日の朝日新聞記事で一段と燃え盛ってきた。もう、どうしようもない、消せそうにない。

1956年の4月頃であったと思う。南極を志す山岳部数人と語らって、百万遍から、下鴨の中川原町の今西邸をたずねた。距離にして2kmか3kmはあったろうが、距離は問題ではない。夕方7時すぎ頃であった。今西園子夫人が応対に出られた。すぐに奥へ入られて、錦司先生の意向を尋ねられたらしい。『今西は、いま、お酒をいただいているのですよ。少しお待ちくださいな。ここで・・・』。僕らは玄関で腰をかけて、今西さんの酒が終わるのを待った。

一時間たち、二時間たち、とうとう四時間たった。今西さんの晩酌はまだ終わらないらしい。目的は、西堀さんへの紹介状を貰い、我々の誰かが東京の西堀さんを尋ね、南極の進行状態を聞き出すことにあった。だから、ここでご機嫌をそこねてはならない。しかし、何とか今夜中に紹介状を貰わなくてはならない、もう4月（1956）の始めだ、間に合うかどうかの瀬戸際だ。ここは我慢のしどころだ、どうしても西堀さんへの紹介状を貰うぞ・・・とはやる心を抑えた。今、それを思い出すと、昔の教授は威張っていたものだと思う。自分が教授になってみたら、学生を玄関先に待たせて、1時間も2時間も酒などを飲んではおられない。これはやはり今西教授との貫禄の違いか。時計は夜11時に迫ろうとしていた。我々はまだ玄関先で座りこんでいた。エエイ、ここで手ぶらで帰らされてたまるか。

・今西さんの談論（紹介状どころではない！）

やっと今西さんに会えた。今西さんはまた酒を飲んでいる最中で大機嫌であった。今西さんの談論には圧倒された。紹介状どころではない。話しはアフリカのゴリラ(その頃、今西先生はアフリカのゴリラの社会学を追及しておられた)から色々なことに飛び、Y談まがいのきわどい話しまで及んだ。我々はただ、ゲタゲタと笑って時を忘れた。その夜、今西邸を辞したのは朝の2時頃だったろうか。そこから、大声で何かを歌って百万遍まで、そこで友人と別れ、さらに私の南禅寺の家まで歩いて帰った。今西邸から3kmや4kmくらいはあったのではなかろうか、自宅に帰ったのは朝の3時を廻っていた。手には紹介状があった。

・50年ぶりに解けた謎（長谷川先生の態度の急変）

長谷川先生が、ブリュッセル会議の前にぼくに南極行きを勧めておいて、帰国後は、それについて一言も触れないのはどうしたことか。ひょっとすると長谷川万吉先生はブリュッセル会議で永田武教授（東大教授、日本代表団の一人、のち南極観測隊隊長）と意見が合わず、南極から手を引かれたのかも知れないと想像したが、以後50年間、疑問はズーと残ったままであった。

今回、朝日新聞社内の古い資料を調査した中に、当時のパリ支局長から東京の朝日新聞本社に報告されてきたブリュッセル会議の経過報告電報があった。それには、永田武教授は、自分（パリ支局長）を秘書扱いにしてコキ使い、各国代表をもてなすのに自分の財布がカラになるまでサービスさせられた、とか、長谷川教授と永田教授とはいいつも対立していて、どちらが団長なのかわからないくらいであった。しかし、会議ではよく各国の発言を抑えて、候補地として、プリンス・ハラルド海岸地域を勝ちとった。…願わくば、将来、学者間の争いを朝日が抑えることが出来ますように、とあった。

自分の推察は正しかった。胸のつかえがおりるような気がした。あの永田さんのことならそういうこともあるだろうと、50年来の謎が解けたような気がした。

・破門！

さて、西堀さんへの紹介状を貰った頃は、南極への夢はますます膨らんでいた。今西さんの言うように、京都で、南極へ参加しないかとお座敷のかかるのを待っていても、そんな声はかからないだろう。やはり、誰かが東京へ行って糸口をつかむべきだ。よし！自分が行こう。そう決心した。1956年4月の中頃であった。その後、長谷川先生は相変わらず南極については知らぬ顔であった。ある時、先生にカマをかけてみた。南極の話をして雰囲気盛り上げてから、『ところで、僕は南極へ行きたいのですが・・・』。長谷川先生から激励を受けると思っていた。ところが、先生の口からは、『君は南極などへ行ってはならん。東京へ行って、永田君の下へ入ってはいかん。今は勉強する時だ・・・』。これは意外なお言葉、勉強しなければならぬ時だなんて、そんなこと判っているガナ。しかし、僕は行きたいのや。それに、そもそも最初に僕に火をつけたのは、先生、あんたやないか……。心の中でそうつぶやいたが、勿論言葉にはならなかった。長谷川先生の言葉は続く。『どうしても行きたいなら勝手にするがよい。君を破門する・・・』。破門とは古くさい言葉だと思った。しかし、後に僕が隊員になった時、新聞が僕を紹介する文に、『北村氏は京大長谷川万吉教授の門下生で・・・』とあったので、門下生とか破門という言葉も当時としては生きていたのかも知れない。

その時は、丁度、大学院修士課程を終了する切れ目の時なので、『破門』とは博士課程には入れてやらない、という意味であったのだろう。それを聞いた友人達は異口同音に『やめとけ、やめとけ』と忠告する。先生に睨まれたら後はどうにもならん。万一、南極へ行けても（行けるとは思ってもいなかったが）その後どうする。大学に戻れないなら学位はとれない、就職も出来ない…。両親も反対した。『就職が出来なかったら、あんたにお嫁さんにくる人はないだろうね。あんたは三条の橋の下しか住めないのねえ・・・』。当時、京都の三条大橋の下には浮浪者が住みついていた。『三条の橋下』は、大貧乏の代名詞であった。

こうして先生、友人、そして親からと、思わぬ周囲の反対に散々悩んだが、やはりどうしても南極に行きたい。南極点とロス海地域は踏まれているが、日本の目指すプリンス・ハラルド海岸一带に近づいたのは誰もいない。そこは全く未知の土地である。判っているものは何もない。肉体を張ることなら僕だって出来ない筈はない。就職を捨て嫁さんも諦めて、それでも、人跡未踏のプリンス・ハラルドを目指したい。

『低くてもよい、人の踏み跡のない山に登れ・・・』、『主流より、辛くても反主流の道を・・・』(京大山岳部)ではないか。

主流とは、先生の勧めるように大学院へ進み、学位をとり、就職し、結婚もし、大過なくこなして当たり前の人生を送ることである。反主流とは、長谷川先生や友人・両親の反対もおして、不利となることを承知で信ずることをすることではないか。よし！この道（南極への道）は中学・高校での教えも満たす、京大山岳部の教えも、“南極へ行け！”と暗に言っているではないか。これでよい！その頃は純真であった。教えに忠実であった。やはり行きたい。その為に学位がとれなくて嫁さんが来なくても、三条橋下に寝てもよい。やはり行きたい……。そういう思いが日に日に強くなってきた。

・東京へ（期待と不安をいだいて）

とうとう決心して、4月の半ば過ぎに長谷川先生にお別れを言いに行った。奨学金で買った大きな木箱のラジオ（当時のハイテク家電製品）と郵便貯金通帳を持って東京行きの夜行列車にのった。勿論三等車（最低のクラス）であった。一晩かかって汽車は東京へ走った。1956年の4月末か5月のはじめの頃であった。前途は、期待と不安で一杯だった。

備考；“破門する！”と怒った長谷川万吉先生は、僕が南極から帰ってみると、ちゃんと大学院（後期博士課程）に入れておいてくれた。先生とは有り難いものである。

2. 西堀栄三郎さんと南極とぼく

“西堀さん”とは、西堀栄三郎元京大教授、日本南極観測隊第一次越冬隊長（1989没）のことである。西堀さんは実に多彩な人である。一芸に秀でている人は何人も知っているが、百芸に秀でている人は滅多にいない。西堀さんはそうした人である。私は、その西堀越冬隊（1957）の隊員であった。

当時、南極はその大部分が未知であった。リュツォウホルム湾は魔の海として誰も近づかなかった。そんな前人未踏のプリンス・ハラルド海岸地域に昭和基地を建て、筆者は修士を終えた直後、西堀さんと一年に亘って生活を共にした（日本第一次南極越冬隊）。やや大げさにいえば、一年間、生死を共にした。普通の付き合いなら、30年分位になるだろう。その後も生涯のお付き合いが続いたので、西堀栄三郎さんについて書くなら本一冊の紙数でも足りない位の量になる。

日本の南極観測は多くの人の努力によって始まった。しかし、筆者は特に五人（茅誠司、松村謙三、広岡知男、矢田喜美雄、西堀栄三郎）の人物の名を挙げたい。南極事業を戦争に例えると、上の5人の中で、4人はいわば後詰めの本営に属し、西堀さんのみが最前線の戦闘部隊の副司令官であった。不思議なことに、こんな重要な功績者であるのに、茅、矢田氏を除いては、これらの人々は、この50年間歴史の霞に隠れて（理由はあるのだが）、その名前さえ知る人々は少なかった。西堀さんとても、第一次越冬隊長ということだけが知られていて、無くてはならない存在であったことは余り知られていない。

この稿では、「京大教授西堀栄三郎さん無かりせば、第一次南極観測は“絶対に”失敗したに違いない、第一次越冬隊の成功があればこそ第三次以降の観測が継続したのであり、今日の日本の南極観測には、西堀栄三郎京大教授は絶対欠かせない功労者であった」ということを声を大にして言いたい。

私が、そう考えるに至った理由を納得して貰うには、やはり文献①をご覧くださいより他はない。この本には、これら先人たちが、50年前、如何に情熱を傾けて南極観測を立ち上げたか、如何に最初の第一次南極観測隊を送りだしたかについての筆者の見聞と文献調査の結果が書いてある。これらは、当時の幹部、茅誠司学術会議会長、永田武第一、二、三次観測隊長、岡野澄文部省学術課長など、その経緯を知る人達を書いておくべきものだが、これらの人々はそれに触れることなくすべて故人となった。私は、当時の最年少者で、そんなことを書く立場にないが、私が死んだら、南極観測の黎明期の記憶は永久に失われてしまうと考え、歴史に証言することとした。

・西堀さんが京大教授であった経緯

西堀栄三郎さんは、「南極時代」に京大教授であった。「南極時代に」と書いたのは、南極は国家事業だから、構成員はすべて国家公務員でなくてはならなかった。西堀栄三郎さんは、当時民間人であったので京大教授ということになったが、氏は京都帝国大学を卒業し、京大講師、助教授に在職した経歴もあるので決して不自然ではない。筆者も当時大学院修士課程を終えたところであったが、「文部省技術員」という公務員になった。西堀さんが京大教授になった京都大学側の経緯は『京大地球物理学研究の百年』の「西堀栄三郎と阿武山地震観測所（竹本修三）」の稿に詳しい。

・南極以前の西堀さん

西堀栄三郎さんは1929年（S4年）京都帝国大学理学部化学科を卒業した。やがて同・化学科の講師になるが、科学者よりも技術者たらんことを目指し、助教授の時（1936）に東芝に転進した。

西堀さんと南極を結ぶ最初のキッカケは、西堀さん11歳の時、兄に連れられて白瀬探検隊の講演を京都の南座に聴きにいったことに始まる。白凱々の氷壁の下を犬そりが進むさまは、西堀少年に深い影響を与えたに違いない。筆者は、その話を昭和基地で聞いた。これが、後年、西堀さんが南極計画に参画した時、それまでの計画に無かった犬そりを、四面楚歌の反対を説得して計画に入れたことの遠因の1つになっていると思う。筆者はこの犬そりのお陰で「犬とオーロラ係隊員」となって第一次に南極越冬隊員になった。そして、続く第三次越冬の際のタロ・ジロ生存の奇跡にめぐり会う運命となった。

・西堀さんと山

西堀さんと山を切り離すことは出来ない。京大地球物理出身者には、京大山岳部、京大探検部、AACK（京大学士山岳会）の関係者が多い。地球物理では、故中島暢太郎教授、故樋口明生助教授、江頭庸夫防災研助手（第五次夏隊員）は、AACK会員であった。リスト初期の南極隊員でAACKの会員は枚挙のいとまがない。西堀さんを語る時、このAACKに触れないわけにはゆかない。西堀さんと今西錦司（京大教授、霊長類）、桑原武夫（京大教授、フランス文学）さんは、中学（京一中、現洛北高校）、高校（三高）を通じての山の友人である。

1931年5月、西堀さんは、この二人とともにAACKを設立した。AACKは、当時、ヒマラヤに多くの未踏峰や未踏地があったので、「未登攀峰」のみを目標とするという哲学を標榜していた。当時はヒマラヤ

がどこにあるかを知っている人も少ない時代であった。西堀さん達には、当時、南極は具体的な視野には入っていなかったであろうが、それでも、冬の富士山登山に極地探検に用いる前進方法「極地法」を用い（1931.12）、その翌年（1932）にはカラフト探検を行って極地法を実地テストした。この時、犬そりが始めて用いられたが、これについて梅棹忠夫（学生隊員。後、京大助教授、京大教授、民博館長、京大名誉教授）が書いた「犬そり」という論文は、後年、筆者が犬そり係になった時のバイブル的存在であった。二年後の白頭山探検登山（1934.12）の時にも、西堀さんは極地法を用いて前進しているから、頭には、「いつの日にか」という気持ちがあったに違いない。

西堀さんは、大東亜戦争開戦寸前にアメリカに留学した。真空管製造技術の研究のためである。休日には各地の元バード探検隊員を訪れ、彼らの南極知識を吸収して回った。中でも影響があったのは、シカゴのボウルダー博士にわざわざ会いに行ったことである。この人は南極の氷の上を効率よく人や物資を運び、小型飛行機さへ積んだ巨大なスノー・クルーザー（タイヤ直径約 3m）と呼ばれるものを発明した人である。そのスノー・クルーザーは実際にはあまりに巨大すぎて、肝心の南極では車輪が雪をかくばかりで前進せず失敗した。しかし、西堀さんにはこの会見は大変有意義であった。頭の中で考えた近代的なものばかりでは南極では失敗する、近代的なものと同時代のものを組み合わせるのが正解であるとの結論を得たという。（本人談）。後年、西堀さんが、近代的な雪上車とともに古典的な犬そりを用意したのは、こうした経験からかも知れない。後にも述べるように、西堀さんのこの考えは正しかった。

西堀さんは戦争直前に日本に帰り、東芝で研究を続ける。終戦直後、物資の不足する中を、ソラという万能小型真空管を発明する。筆者は中学生の時（終戦直後）、ラジオ製作に夢中になったが、このソラを闇市で手に入れたことが自慢であった。その後、西堀さんは推計学を勉強した。これは戦争中、自宅の庭に落ちた焼夷弾に不発のものが多いのを見て、品質管理の必要性を痛感したからだという。折から来日したアメリカの推計学の泰斗デミングを各地の会社に案内して品質管理の実地訓練を積み、その後、各会社の製品ムラをなくするフリーな技術顧問をする。これが後年、南極の設営責任者となったとき、国家予算では賄いきれなかった多くの製品などの寄贈に連なった。私も南極準備期間中、幾つかの会社に寄贈品を受取りに行かされた。

・西堀さんが設営責任者となった経緯

南極計画に関係した役人・研究者は、最初、南極準備は自分達（学者・研究者）だけで出来ると考えていたが、やがて設営の重大さに気づき、その責任者を探した。茅学術会議会長が、日頃親密に交際している桑原武夫京大教授（後の学術会議副会長）に相談したところ、「うってつけの人物がいます」と答えたことから西堀栄三郎の名前が浮かび出た。桑原氏は西堀さんと中学時代から親交を結び、互いに相手を良く知り、一目おいている仲であった。この推薦の経緯は桑原武夫の「西堀越冬隊長」（文献②）に書いてある。茅氏はいろいろな人に設営責任者の推薦を依頼したが、いずれも西堀さんを推薦した。初めての南極越冬を成功させるのは西堀さんにおいて他はないと。最後に、日本山岳会会長の別宮貞俊氏の推薦が決め手になって西堀さんが決まった。西堀さんが南極計画に参画したのは、計画開始より半年も後であった。

・真夜中のニワトリ

西堀さんのニックネームを“『真夜中』のニワトリ”という。ニワトリに真夜中に鳴かれては、人々はまだ睡眠中であるのでその超先見性を感じる人は少ないし、逆に迷惑さへ感じる。西堀さんはまさにその“『真夜中』のニワトリ”であった。だから、人々は迷惑し反対する。しかし、夜が明けてからその超先見性が明らかになり、人々はそうだったのかと西堀栄三郎を理解し、逆に礼賛さえする。例えば、文部省の岡野澄学術課長（南極全般の国側の推進者）は、初めは、西堀さんが今までの計画にない色々なことを持ち込むので困惑し手を焼いていた。他省の委員からの評判も悪かった。しかし、後に、岡野氏は、『第一次隊が越冬隊を残す企ては、西堀栄三郎博士によって進められた。博士は自ら未踏の極地の越冬隊長に任じ、昭和基地を創りだした大功労者である。』と称えている。（文献③）

・西堀さんの貢献

① 航空機を持参することを提唱したこと（これが決め手になった）

朝日新聞社の片隅で生まれた南極構想を、国の事業として行うと正式に宣言したのは、1955年11月4日の閣議決定であり、出発の約1年前であった。大方の人々は、この閣議決定を南極の始まりと理解して

いる。これは『国として南極を行なう』という公式的な宣言であるが、南極について何も知らない各省の役人や政治家によって閣議決定がされる筈はない。それまでに、大勢の人が大変な努力をして、決定まで持っていっただのである。西堀さんもその一人であった。

国による南極の準備は、この閣議決定以後急ピッチで進められたが、計画の中には航空機は含まれていなかった。この時、真夜中のにわとりが、航空機の必要性を喧しく説いて鳴いた。しかし、当時は世の中が南極事情について『真夜中』であったため、このニワトリの鳴き声をうるさく感じ、反対する人々が多く、西堀さんは孤軍奮闘した。西堀さんのそうした努力、言動に非の打ち所がなかったとは言えないが、人々は不承不承に西堀さんの提言を認めた。これが初回の第一次南極遠征大成功の第一原因となったのである。宗谷はこの小型飛行機（サチ風号）により、氷海外縁近くからリュツォウホルム湾深くに通じる“大利根水道”（幅 100m くらいの氷と氷の割れ目。風によって生ずる）という氷の割れ目の水道を発見し、それを伝ってスルスルとオングル島（昭和基地の建設されたところ）に近づき、困難は色々あったが、とにかく昭和基地を建設し、そこに第一次越冬隊を残すことに成功したのである。

もし、西堀さんが周囲の反対の声に屈し航空機を断念していたら、この大利根水道の発見もなく、宗谷はプリンス・ハラルド海岸にも近づけず、初回の南極遠征は失敗していただろう。現在、小型飛行機に代わってヘリコプターを持参するのは当然と考えられているが、50 年前には、西堀ニワトリの喧しい鳴き声でやっと実現したものなのである。

② 最初から越冬（予備観測の越冬（第一次越冬））を提唱

その頃、初回（第一次観測）を予備観測、2 回目を本観測（第二次観測）と呼んでいた。永田隊長はじめ、国側がたてた計画では、予備観測ではプリンス・ハラルド周辺を偵察して、南極を一応経験し、越冬せずに資材だけを現地に残して翌年の本観測に備えるとしていた。

西堀さんは言う。本観測で初めて越冬するものとする、研究者が“南極の厳しさに耐えて生活すること”と、“観測研究”という 2 つの困難な仕事を同時にしなければならず、それぞれが相当な困難を伴う。予備観測で日本の冬山経験者が先ず越冬を経験し、その結果を逐一日本に報告して本観測に備える方がよいことは明白である。この予備観測での最初の越冬は本番の越冬観測の成功のために欠くことが出来ないものである。

今、50 年経てみると、確かにこの予備観測での最初の越冬説は卓見であった。この第一次の最初の越冬の成功がなかったら、その後の観測は無かったに違いない。当時の世論はそうであった。（文献④）

③ 犬そりを提案したこと

もともとの計画には、犬そりはなかった。輸送法として雪上車だけが予定されていた。西堀さんが参画するようになって、犬そりが採用されることになった。当時の日本の雪上車には技術的な自信がなかったが、実績のある英国やオーストラリアから、雪上車などの輸入も出来なかった。極地通の西堀さんは、全面的に雪上車に頼ることは危険であると考えた（スノー・クルーザの経験）。西堀さんは尊敬する先輩、北海道の加納一郎氏を訪ね、犬そりに関する意見をたどした。この時、西堀さんは加納氏の紹介で、わが国唯一のカラフト犬研究者の犬飼哲夫北大教授（1989 没）に会い、カラフト犬を集め、南極用のそり犬チームを第一次観測隊の出発に間に合うように用意することを依頼した。1956 年 2 月のことである。

結果、雪上車は一年間に 1 台あたり約 420km で動かなくなったが、犬ぞりは 1600km 走って、なお余裕があった。これは、明らかに犬そりの成功であり、犬そりが無かったら、ボツヌーテン（往復 435km）もオラーフ海岸探検の旅（往復 355km）も出来なかった。

・越冬中の貢献

紙数も尽きたので、越冬中の貢献を一つだけ紹介しよう。第一次越冬の目的の一つは、日々の経験を残らず日本に通信し、翌年の本観測の準備に資するというものであった。昭和基地では、毎朝、食事時には食堂に全員が集まり、朝食とその後の楽しい談笑の時間を持つのが常だった。

ある朝、通信係りの作間隊員が憂鬱そうな顔をして食堂に現れた。聞くと、送信用真空管の大電力管がまたイカレた、という。「また」とは、いままでに何度もイカレた。これで最後の一本だという。無線機は、スペアが一台あり、この送信用真空管が一台に三本使ってある。だから計六本の大電力管があることになるが、それに対し、予備は一本しかない。一本、当時で 10 万円するから、確かに高額ではある。私の技術員としての給料が 10800 円であることに比べると、大学生の初任給の 10 倍は確かに高額だ。しかしいくら高額でも、六本に一本の予備とは少なすぎる。

予備の無線機の大電力管も使い果たし、これが予備の最後の一本だという。これで日本との通信は、今日から出来なくなるという。西堀さんは黙って作問隊員を伴って無線室に行き、故障の詳細を正した。通信が連続して長く行われるものだから、フィラメントが垂れ下がってグリッドにくっついてしまったようだ。西堀さんは暫く考えていたが、その故障管を逆さま吊り下げ、蓄電池からフィラメントに電流を供給した。数日だろうか、逆さまに放置された真空管のフィラメントは見事にグリッドから離れ、また通信機が復活した。残りの故障した管も逆さまに吊るされ、無線室は干し柿が干してあるような有様になった。こんなことで、どうにか一年間の通信を確保し、目的を果たした。これなど、済んでしまえば何でもないが、その時は、誰も、無線一級の通信士でも気が付かない方法であった。

西堀さんがいなかったら、第一次越冬隊の全員が死に絶えることはないにしても、通信は最初の1ヶ月で終わり、第一次越冬の経験を次の本観測準備に生かすという使命が果たせず、その上、本観測（第二次越冬）が失敗に終わったことを考えあわせると、第三次の遠征を出すことにはならなかったであろう。筆者は、今でも第一次に西堀さんがいなかったら。今の南極観測は無いに違いないと考える。

西堀さんは、南極以外にも山岳界の先達として、また品質管理（デミング賞本章受賞）や原子力問題、ネパールとの交流等幅広い分野で最先端をきり開いた類稀なる独創的一探検家精神を生涯堅持し、『創意工夫の人生』を平成元年（1989）4月に閉じた。享年86歳であった。

西堀さんの大きな足跡は、「南極越冬記」（文献⑤）、「西堀栄三郎選集（1巻～3巻）」、別巻（人生にロマンを求めて—西堀栄三郎追悼）、（文献⑥）、に詳しい。

- 文献 ① 北村泰一、仮題「南極昭和基地創設物語」、・・・（2011 発刊予定）発行所未定。
② 桑原武夫、「西堀南極越冬隊長」文芸春秋、1957、六月号。
③ 岡野澄、「戦後学術行政回顧録（第3回）」、学術月報 V47, #12, 1994。
④ 浦松佐美太郎、「南極ぶっつけ本番」、文芸春秋、1958、4月号。
⑤ 西堀栄三郎、「南極越冬記」、岩波新書、1958。
⑥ 「西堀栄三郎選集（1巻～3巻）」、別巻（人生にロマンを求めて—西堀栄三郎追悼）、悠々社、1991。

3. 福島 紳君のこと

福島 紳君は1950年、私と共に京大理学部入学、1954年、やはり私と共に大学院修士課程（長谷川万吉研究室）に入った。彼は長島一男氏（当時助手、後名古屋大学名誉教授）のもとに宇宙線、私は広野求和氏のもとで地磁気の指導を受けた。彼は、私が第一次越冬中（1957）に理化学研究所（理研）に入所し、理研から南極の宇宙線担当の第四次越冬隊員として、彼自身が開発に貢献したと聞く中性子宇宙線計を携え昭和基地に赴いたが、冬が明けたある日、ブリザード（雪嵐）の中を戸外に出てそのまま行方不明となった。

私と福島は錦林小学校（京都岡崎）から一緒であった。小学校では同じクラスであったので自然に親しくなった。ある時、電気モーターは、どうして同じ方向に回転するかが議論となり、私は彼の博識に驚かされた。そして交友がはじまった。中学（旧制度の京一中）も一緒だった。それでますます親密になった。互いにいつも同じことに興味をもち、競っていた。彼がラジオの製作を始めると、私も負けじと同じようなものを作った。小型真空管の「ソラ」（西堀栄三郎氏発明）を手に入れ、彼に自慢したのもこの頃であった。私がヴァイオリンを始めると、彼もやり始めるといった具合であったが、いつも福島の方が長続きし、スマートで一枚上手であった。

高等学校も、共に鴨沂高校（新制度）。クラスは一緒にならなかったが、放課後にはいつも誘いあって一緒になった。自宅が岡崎（福島）と南禅寺（北村）と近いせいもあって、夜遅くから誘いあってその辺を歩きながら、いろいろなことを語りあった。彼は秀才の上、ハンサムでもあった。目玉が大きく額が広く、頬の髭が濃く、かみそりのあとがいつも青々としていた。性質も良かったので、自然にいつも女子生徒に囲まれていた。秀才であるのにイヤミがなく、女子に囲まれているからといって、良い気になっているところがないので、男にも女にも人気が高かった。私はそんな彼をいつも羨望の目で見ていた。

あまり毎日一緒であるので、大学受験も迫ってきたころ、なるべく別々の道を歩こうと相談して、私は北大、彼は京大を受験することとなった。私が北大受験を決めたのは、中学時代の先生の影響であるが、

実際に受験する時になり、北海道へ受験のために渡ることが大変であることがわかった。その頃は汽車と青函連絡船を乗り継ぎ、見知らぬ土地に一人で行くことに大きな困難があった。

高校の先生や友人達は、近くに京大という大学があるのに、そんな不便な目をして何故北大にゆくのか、と訝かられ、私も、それもそうだと思い京大を受験した。彼は理学部で、私も理学部を受験したので、たまたま一緒になった。クラスは別々だったが、京大に入学して今度こそは別々に歩こう、とぼくは山岳部へ入部することにし、福島は入らないことになった。

大学三回生になって専門の分属があった。それぞれ教授が説明にたった。地球物理分野では長谷川万吉教授が教壇にたった。今でも覚えている。「諸君の頭の上には電流が渦をまいて流れている。仏様の頭のように・・・」。それを聞いて、私は、瞬時に地球物理の電磁気分野に進むことを決めた。フタが開いてみると、たまたま福島と一緒にあった。彼は化学に興味を持っている筈だったのに・・・。彼も、私が宇宙物理に願書を出しているものと思っていたらしい。顔を見合わせたが、まあいいやと、互いに簡単に諦めがついた。大学院を受験することになって、福島君は早くから大学院電磁気学専攻を標榜していた。私は大学院に進まないつもりであったが、四回生のときに、ある理由があつて大学院を受験することになった。どちらも学部で電磁気学分野であったので、修士での専攻も電磁気学分野に決まった。気がついてみると、いつの間にか、やはり同じ道を歩いていた。

ぼくは、もともと未知の土地に憧れ、それゆえに山岳部に入り、未知の土地、南極に憧れたが、彼は南極に興味をもつ理由がないと思っていたのに（山岳部でないから）、結局、二人とも南極に関係することになってしまった。僕は一・三次越冬、彼は第四次越冬と。そして、それが最後となった。彼には山の経験が無く、私にはあった。これが私と福島の生死の分かれの原因であつたように思う。

考えると、彼は宇宙線担当。室内の仕事で、南極で死ぬというチャンスは皆無のはずだった。私は大係で南極の前人未踏の氷原を犬そりでゆく時には大変な困難に会ったが、夢を実現出来たことに満足した。生還を期しがたい犬そりによるボツヌーテン旅行（基地から 200 km 離れた 1 ヶ月の大旅行＝今ならなんでもない）や、その他、死ぬ思いを何度も経験し、死の確率はぼくの方がずっと大きいはずだった。それが逆になろうとは。結局、これも神さまがきめた運命かと、いささか、宗教めいた解決しか出来ない。

彼の遭難の様子を簡単に述べよう。もう 50 年も昔のことなので、詳しいことを述べてもあまり意味がない。それは 1960 年 10 月 10 日に起った。その二、三日前から大きなブリザードが昭和基地を襲っていた。

この話をする前に、少し予備知識が要る。第一次越冬で、雪上車は一台 400km を走って動けなくなったが、犬そりは 1600km 走ってまだ余裕があつたと述べた。最初としては上出来である。それを用意した西堀さんも、大係の私たちも面目を施し、次の第 2 次隊と交代準備をしていた。ところが、第 2 次は、昨年と打って変わった氷海の悪さに、とうとう越冬を断念して、犬たちだけが昭和基地に残留されることになった。私は、残留された犬たちのことが気がかりで、一年後の第三次越冬隊員となって再び昭和基地に赴いた。そして、そこで生存していたタロ・ジロと再会した。一年後、タロ・ジロを第四次越冬隊に引き継いで私達は帰国した。ジロはその後、数ヶ月して、病を得て昭和基地で眠った。私が去るとき、福島に「タロ・ジロを頼むよ」と言った。その時は単なる別れの挨拶のつもりだったが、福島の遭難にあたって、今でも気になっている言葉である。

話を戻そう。もうブリザードも数日続いているので、その間、タロに食事も与えていない。様子を見に行こうと第四次越冬隊の大係の吉田栄夫隊員（極地研名誉教授）が福島を誘った。福島は宇宙線担当という室内業務が任務だったので、そんな吉田隊員の要請を受け入れる必要はなかった、と思える。しかし福島はそれに応えた。この点に引っかかる。その時、私が言った「タロ・ジロを頼むよ」という言葉が彼の頭になかったとはいえない。とすると、福島の遭難には、自分にも一端の責任がある！自分は要らざることと言ったのだろうか？

タロはブリザードの中、基地の出入り口から 10m ほどのところに係留されていた。ブリザードは吹き放しでなく、人の呼吸のように息をつくものだ。その中をタロは風上に向かって背を丸め、風下にむかって顔を腹に埋めて半分雪に埋もれて蹲っていたはずだ。遠くから見ると、それは石か何かに見える。私なら想像できるが、吉田隊員と福島は、その方向を見定めて、ブリザードの息つく間をタロに近づいていったのだろう。

丁度その時間、瞬間風速 51m/秒を記録していた。それは直立し難い風速である。雪が混じるから視界も悪くなる。腕を伸ばしたら手袋が見えないことは何度も経験した。タロの前に餌を置いて、瞬時に吹

きとばされてしまう。犬は 3、4 日は何も食べなくても平気だ。そんなことは何度も経験した。恐らく吉田君は、タロの餌を持って行って、そんな経験をしたことであろう。

吉田と福島は基地へ帰ろうとした。吉田が、やっとの思いで基地にたどり着いた。吉田は直ぐうしろに福島がついてきているものと思い込んでいたという。10m の距離を基地に向かって歩く間、吉田は後ろを振り向く余裕はなかった。だが、基地に到着したとき、後ろをみると、そこに福島の姿はなかった。午後二時ころだった。すぐに手当て（遭難と気づき、サイレンを鳴らすとか捜索隊を出すとか、事件発生の認識をするとか）をすれば、福島は助かっていたかも知れない。しかし、その時、運悪く、数日前に隣のベルギー基地（昭和基地から数百 km）から小型飛行機で数人のベルギー人が来ていた。彼らは基地から 500m ほど離れた海氷上にテントを張り、寝起きしていたが、その日にはベルギー隊員の何人かが基地の建物に来ていて、隊長はその対応に追われていたという。そのうちに、別のベルギー隊員の一人が、このブリザードの中を行方不明となっているとの知らせがあり、隊長は、またまたその対応にも追われていた。しばらくして、その隊員は無事に発見されたという知らせが入った。そんな時に福島事件が起こった。私は、事件発生の“認識”が遅れたのではないかと思う。

かなりしてから、山に経験のある隊員が二人一組で、三組捜索に出た。まず、A,B の二隊が出発し、暫くして C 隊が出た。いずれも暗くなるまでに帰ってくる筈であった。まず、B 組が空しく帰ってきた。だが、A,C 組は暗くなっても帰ってこなかった。あとで聞くと、ブリザードのために帰ろうとしても帰れなかったという。仕方なしに、その場所に雪洞（雪に横穴か縦穴を掘って、入口を何かで覆い、一晚を過ごす。日本の冬山で、時々やる方法）を掘ってその夜を過ごした。翌日、10 時頃にブリザードが小止みになった時、C 組の一人が穴からはい出た。と、数 m 先にやはり穴らしいものがあつた。そうこうしている間に、そこから人が出てきた。見ると、それは A 組の二人であつたという。前日の激しいブリザードの中を数 m 離れて行動していたために互いにわからず、互いの雪洞作業にも気がつかなかったという。ブリザードは二、三日後に収まった。が、福島は帰ってこなかった。その間、必死の捜索が続けられたことは勿論である。一週間後、文部省は福島死亡を認定した。

その後、毎年の越冬隊によって福島の遺体の捜索が行われたが、その姿は瑤として判らなかつた。7 年の月日が流れた 1968 年の 2 月、第九次夏隊と第八次越冬隊を乗せたふじ（二代目）は、仕事を全て終え、明日に控えた離岸を前に隊員も乗組員ものんびりしていた。仕事を終えた村越望氏は（私は第一次越冬で村越氏と一緒にあつた。彼は福島と同じ第四次越冬隊で二度目の越冬をし、第九次夏隊員として三度目の昭和基地に来ていた）開放された気分、西オングル（基地は東オングル）を散歩していた。とある岩陰にもたれて座っている人影が見えた。彼は福島を直感したという。そこは、基地から直線距離で約 4.2km、普通の日には徒歩で 1.5 時間のところであつた。七年の歳月にも拘わらず遺体は美しいままであつたという。あの時、福島はブリザードの中を、恐怖とたたかいながら、数時間、或いは翌日まで彷徨ってここまで来て力が尽きたに違いない。

その報は直ちに船に届いた。この時、不思議なことが判つた。その時、そこには、七年前福島と同じ第四次越冬隊員であつた者が五人もいたのである。その中には、福島とタロに餌をやりに出た吉田栄夫君もいた。遺体はその場で茶毘にふせられた。昔の仲間、五人と大勢の人に見守られながら。偶然だろうが、こんなことは前にもあとにもない。七年間、探しまくって発見できなかった遺体が、それも明日は離岸という帰国前日に、しかも七年昔の仲間五人も一緒に、その五人が見守る中を葬られた。

遭難の翌年（1961）、昭和基地の片隅に人の丈を越す大きなケルン（石塚）が建設され、「福島 紳 君 この地に逝く」と大書された銅製銘板がはめ込まれた。名盤は錦林小学校の友人により浄財が集められ、遭難の経緯は私により、字は長谷川万吉京大教授により、日英両文でしたためられた。英文は中西信太郎京大教授（文学部英文学科）によって書かれた。

今、世界の地図に日本隊の発見した大陸奥地の大和山脈の最高峰に“福島岳”と名づけられた山（2494m）が載っている。私が、当時、「タマ氷河」や「タマ岬」と名づけたのは、その後改名されて世界で認められているが、それはオラフ海岸の小さい氷河と岩である。

（文献）

北村泰一、「南極第一次越冬隊とカラフト犬」，教育社，1982

北村泰一、「南極越冬隊 「タロジロ」の真実」，小学館文庫，2007